

演題番号：D11

## 脳腫瘍摘出手術を実施し、悪性黒色腫と診断された犬2例

○山田寛生<sup>1) 2)</sup>，坪居穩佳<sup>1) 2)</sup>，井上克徳<sup>1) 2)</sup>，寺田康平<sup>1) 2)</sup>，井尻篤木<sup>1) 2)</sup>

<sup>1)</sup> アツキ動物医療センター，<sup>2)</sup> 日本動物脳神経脊椎センター

1. はじめに：犬の悪性黒色腫は口腔内や皮膚に多く認められる悪性腫瘍である。頭蓋内病変の悪性黒色腫は転移性または中枢神経系原発性に分けられる。獣医学領域では、悪性黒色腫の頭蓋内病変の報告はわずかであり、頭蓋内病変に対する画像所見および治療に関する報告は、ほとんどされていない。そこで今回我々は、犬の頭蓋内腫瘍に対して脳腫瘍摘出手術を実施し、悪性黒色腫と診断された2例についての画像学的特徴および治療について検討した。

2. 材料および方法：症例1は柴犬、9歳11か月齢。3日前より発作、沈鬱傾向、右旋回を認め、当院を紹介受診し、CT・MRI検査を実施。CT検査にて右側側頭葉領域にX線高吸収所見を呈する腫瘍性病変を認め、脾臓にも腫瘍性病変を認めた。MRI検査では右側側頭葉底部にT1強調にて高信号、T2強調にて低信号、FLAIRにて低信号、T2スターにて低信号、T1強調ガドリニウム造影にて増強を示す腫瘍性病変を認めた。症例2はミニチュア・シュナウザー、11歳2か月齢。3週間前より四肢不全麻痺を認め、当院を紹介受診し、CT・MRI検査を実施。右側大脳にX線高吸収所見を呈する腫瘍性病変を認める。MRI検査では右側側脳室領域にT2強調およ

びFLAIRにて不均一に高信号、T1強調にて等信号を示し、T1強調ガドリニウム造影にて増強を示す腫瘍性病変を認めた。症例1、2ともに検査後2日目に開頭下脳腫瘍摘出手術を実施した。

3. 結果：2例とも術後の病理組織学的検査では悪性黒色腫と診断された。症例1は術後2日目より自力歩行を認め、意識レベルの改善を認めた。術後16日目に退院となった。その後も発作は認められず、現在経過良好である。症例2は術後3日目より自力歩行を認め、術後14日目に退院となった。その後、術後20日目に重責発作を呈し、昏睡状態となり、術後35日目に死亡した。

4. 考察および結語：症例1ではMRI画像にてT1強調で高信号、T2強調で低信号所見を認め、これは人の典型的な中枢神経系原発性悪性黒色腫と同様の特徴的画像所見を示した。一方で、症例2のように人医療においてもメラノーマの種類や腫瘍内出血の有無によって異なるMRI所見を示すと報告されている。外科的切除により術前からの改善を認めたことから頭蓋内の悪性黒色腫に対しても外科的摘出手術が治療のひとつとして有効な可能性が考えられる。